

# 天草版『伊曾保物語』における「～バ」の用法

キーワード：未然形＋バ 已然形＋バ 主題 時間的順序性 反実仮想

康 雯 琪

## 1 はじめに

阪倉篤義（1993）は順接条件表現の形式について、古代語における「未然形＋バ」と「已然形＋バ」の用法が均質的に分布するのに対して、中世に入ると順接条件の表現形式がかなり多様になるとする。「未然形＋バ」の勢力が弱体化し、代わりに「タラバ」・「ナラバ」及び一部分の「已然形＋バ」が仮定条件の役目を担うという（注1）。その後、小林賢次（1996）は室町時代から近世・江戸時代にかけての変遷を研究し、室町時代ごろから一般の「未然形＋バ」の形式が衰退し、「已然形＋バ」の方が恒常条件の表現に進出してきたのに対して、「ナラバ」・「タラバ」はそれぞれ非完了性仮定・完了性仮定の表現形式として発達してきた形式であり、それ自身が古代語の「未然形＋バ」に代わるものであったと述べられた（注2）。

以上のように、「已然形＋バ」・「ナラバ」・「タラバ」の用法が発達することによって、形式的な面に現れる勢力的消長が見られるということと、各形式において恒常条件・非完了性仮定・完了性仮定のような意味機能が相補的に分布するということが指摘されている。

「～バ」節を前件、これを受ける帰結部を後件と呼ぶと前件は次のような内容を持つ。動詞に「バ」が接続し、「未然形（或いは已然形）＋バ」となり、これは「動詞連用形＋タラバ（或いは「タレバ」）」とテンス上及び形式上、ル形とタ形に対立することになる。「ナラバ」はル形とタ形を各々接続できるので「未然形（或いは已然形）＋バ」・「タラバ（或いは「タレバ」）」とは別個の対立を有する。事柄部分がル形ならば「未然形（或いは已然形）＋バ」、タ形ならば「～タラバ（或いは「タレバ」）」の対立があり、ル形であれタ形であれ「～ナラバ」という形式をもっていることになる。これは事柄のテンスを表すためには必要な形式かもしれない。

しかし、本稿では室町末期において既に本稿で取り上げる表現が次章以下で述べるような要因によって用法が各々限定されているということを明らかにする。「動詞未然形＋バ」・「タラバ」・「ナラバ」・「動詞已然形＋バ」・「タレバ」・「ナレバ」の用法についてどこが似ていて、どこが違っているのかという問題に注目するが、特に意味

的側面及び語用論・統語論的な観点から考察する。具体的には、次のような分析を試みる。「未然形＋バ」と「已然形＋バ」の用法を①地の文か会話文かという点、②「未然形＋バ」と「已然形＋バ」における後件の文末成分、③前件と後件における主題の関係、④前件と後件における時間的な関係、を主に見て行きたいと思う。尚、天草版『伊曾保物語』（勉誠社文庫3）を中心に論をすすめるが、これは紙幅の関係から今回は考察の視点と結論を中心に述べざるを得なかったためである。

## 2 「未然形＋バ」の用法

天草版『伊曾保物語』の中で、「未然形＋バ」がどのような場面でもちいられているかをまとめると（表1）になる。

（表1）	会話文	下 心	引用文	心中思惟	地の文
動詞未然形＋バ	20	1	1	1	0
タラバ	4	0	0	0	0
ナラバ	12	2	0	1	0

このように「未然形＋バ」の用法は殆ど、会話文の中で使われている。物語において作中人物が自分の思考を言語化し、特定の相手に対して話し手の感情・意志・要求・命令・質問などを伝達する。このことから、「未然形＋バ」は話し手の主観的な態度に関わる表現と予想される（注3）。

ただし、（表1）に見られるように下心・引用文・心中思惟文にも6例があるが、例えば、1のような文は教訓を読者に述べる部分であり、2のような文は作中人物の心内の発話であり、3のような文は作中人物の発話を引用して相手に情報を伝える文であり、これらも主観的な態度と言っていいと思われる。このような例のみ6例があるのである。

- 1 何をも知らいで知った振をせば、忽ち言下に人から見知られて恥に及うで退ぞかうず。（479-24）
- 2 時を計られたを下女これを大きに嫌うてかの鶏さえないならば、これ程弘暁に起こされまじいもの思うて（470-3）
- 3 この事が成就致さば、これより毎年宝の車を贈らうず。（434-8）

また、後件の文末表現からも話し手の主観的な態度との関わりが指摘できる。まず、「未然形＋バ」における後件の文末表現について（表2）のようにまとめられる。

〔表2〕	動詞 タ形	チャ 形	疑イ モナイ	ウ 形	ウズ 形	ウズル 形	マイ	マジ イ	命令 形
動詞未然形+バ		2		3	3	5			4
タラバ				2			1	1	
ナラバ	1		1		3	2	2	1	1

「未然形+バ」の用法には4のように「ちゃ」で終わるもの、5のように「疑いもない」で終わるものもあるが、このような表現は話し手の主観的な判断という性格が強いと思われる。また、6のように「うぞ」で終わる意志表現、7のように「うず」で終わる推量表現、8のように「まいものを」で終わる否定推量はすべて話し手の発話・伝達のもダリティーに関する助動詞である。「未然形+バ」の用法において、話し手の主観的な態度に関係する成分が多くもちいられていることが分かる。

4 この麻が成長して絹となり、網とならば我らが果口ぢゃ。(453-7)

5 ましてや言わんその下人の如く番をする我らをも油断するものならば、やがて食われようずる事は疑いもない。(497-16)

6 何とせば、この癖を直さうぞ。(496-9)

7 左右無う走り出るならば、あれも逃げようず。(459-1)

8 存生の時、それ程直に心があつたらば、今この害をば受けまいものを。(495-24)

既に〔表1〕で「未然形+バ」の用法が会話文に多く使われ、このことから「未然形+バ」が話し手の主観的な態度に関わる表現ではないかと推定した。〔表2〕はこれを裏付ける結果だと思われる。

前件と後件の主題の一致と不一致について考えたい。ここでいう主題とは主格助詞「が」の前に表れる体言だけではなく、文脈的に主題になれる要素も主題の一部分であるとした（注4）。例えば、体言が存在の主体である場合、9のように存在表現「知恵がある」が形容する「(あなたの) 頭」も主題に含めた。そして、後件の動作主を顕在化させると、9'のように前件と後件の主題が一致すると思われる。また、10は後件に主題が顕われていないが、文脈によれば「(イソボが) 定めて奏聞申さうず」と言っており、一致するとみなされる。また、11は「(あなたは) 我にその半分を下されば、(我はあなたに) こし召すやうを教えましょう」と言っている例である。前件と後件の主題がやりもらい関係であり、前件と後件の主題が密接な関連をもっている。また、12は前件の事態が実現することを仮定すれば、その前件事態は「瑕疵である」と言っているのである。仮に、後件の主題を明示すると12'のようになる。これは後件の主題が

前件の内容を指示すると言える。

9 御辺の願にある鬚の数程、頭に知恵があるならば、遠慮もなう井の中へは入るまいぞ。(491-8)

9' (私が思うにあなたの頭に) 知恵があるならば、(私が思うにあなたは) 遠慮もなう井の中へは入るまいぞ。

10 もしこの事をイソボが知らば、定めて奏聞申さうず。(433-2)

11 我にその半分を下されば、こし召すやうを教えましょう。(449-19)

12 ここを去って我らが悪名を言わば、この島の暇種であらうず。(441-23)

12' ここを去って我らが悪名を言わば、(それは) この島の暇種であらうず。

以上の観点から前件と後件の主題の一致・不一致については次のような三つのタイプに分けることができ、天草版『伊曾保物語』の「未然形+バ」を調査分類してみると、以下の数字を得る。

(1) 前件と後件の主題が一致する

会話文—26例 下心—3例 引用文—1例 心中思惟—2例

(2) 前件と後件の主題がやりもらい関係

会話文—8例

(3) 後件の主題が前件の内容を示す

会話文—3例

「未然形+バ」の用法は前件と後件の主題がよく一致したり、お互いがやりもらい関係があるなどして、密接な関係を有していることが分かる。

次に、「未然形+バ」における前件と後件との時間的な関係について述べたい。

まず、「未然形+バ」節の述語を動作性と状態性とに分類する。また、前件の事態が後件の事態より先に起こる場合、両者の時間関係を「先行—後続」とし、前件の事態が後件の事態より後で起こる場合、両者の時間関係を「後続—先行」とする。両者に、重複的或いは接触的な同時性があれば、「同時」とする(注5)。但し、次のような例がある。

13 その上上様へ遣わさるるならば、明らかに上様へと仰せられいで、ただ我が大切に思う者と仰せられた(によって…) (423-17)

この例は文脈上、次のような文の途中を省略してできた反実仮想の表現だと思われる。

13' その上上様へ遣わさるるならば、(明らかに上様へと仰せらるべきを) 明らかに上様へと仰せられいで、ただ我が大切に思う者と仰せられた(によって…)

従って、「上様へ遣わさるるならば」が従属するのはその省略部分と思われるので、考察の対象から除く。すると「未然形+バ」の時間的な関係は次の9タイプに分けること

ができる（番号は用例番号を示す）。

(表3)	ル形・タ形が動作性述語	ル形・タ形が状態性述語
動詞未然形+バ	先行—後続 14	同時 15
タラバ	先行—後続 16 先行—後続（反実仮想） 18	先行—後続（反実仮想） 17

(表4)	ル形・タ形が動作性述語	ル形・タ形が状態性述語
ナラバ	先行—後続 19 先行—後続（タナラバ） 20	同時 21 同時（反実仮想） 22

- 14 我にその半分を下されば、こし召すやうを教えまらしょうず。(449-19)
- 15 そちは痛むところがあらば見せい。(459-5)
- 16 それを顕しまらしたらば、何たる御恩賞にか預からうぞ。(419-13)
- 17 存生の時、それ程直に心があつたらば、今この害をば受けまいものを。(495-24)
- 18 さきに驢馬の侘びた時、そつと合力したらばこれ程重荷は持つまじいものを。  
(480-17)
- 19 そちと問答をするならば、終わり果てがあるまい。(413-24)
- 20 某申し当てたならば、諸人御身を崇敬致さうず。(426-11)
- 21 イソボさえもあるならば、この不審をたやすう啓き、我が譽を輝かし、国の智略  
をも揚げようずる。(434-21)
- 22 かの鷄さえないならば、これ程払暁には起こされまじいものを。(470-3)
- 14～22のように「未然形+バ」は全て仮定を表す条件節に属する。

まず、「未然形+バ」・「タラバ」・「ナラバ」のうち、前件が動作性述語の14・16・19・20は「先行—後続」の関係を表し、後件の事態が動作性であっても状態性であっても全て未来を表すことが分かる。

また、「未然形+バ」・「タラバ」・「ナラバ」のうち、前件が状態性述語の15・21は全て「同時」の関係である。前件の状態性述語の時間帯において後件の動作性述語が生起するので前件と後件の時間関係は接触的同時性でなく、重複的な同時性の関係になっていると思われる。

このように、前件が動作性述語、後件の述語が未来を表す時、「先行—後続」の関係をもつ。前件が状態性述語、後件が未来を表す時、「同時」の関係をもつという特徴が見られる。

しかし、17・18・22のような事実反した仮定をする、いわゆる「反実仮想」と呼ば

れるものは既に述べた假定表現とは異なる。17・18において述語の動作性とは関係なく、前件の「存生の時」「さきに」及びタ形であること、後件の「いま」のような時間的な修飾語によって、「先行—後続」の関係が決められる。そして、22のような反実仮想において前件と後件がまだ起こっていない事態ではなく、発話時の時点において進行中の動作、あるいは存続の状態に反する表現と思われる。それゆえ、「反実仮想」の時間関係は述語の動作性と状態性によって説明するより、時間的な修飾語によって説明した方がよいと思われる。

「未然形＋バ」は「先行—後続」の場合、前件が殆ど動作性述語であり、「同時」の場合、前件が殆ど状態性述語である。また、「反実仮想」の場合、前件と後件の時間的な修飾語が時間の順序関係を定める鍵になるなどして、「未然形＋バ」前件と後件との間には時間の序列を持つことが分かる。

従来の研究において、「非完了性假定」・「完了性假定」が重要な観点として説明されることがあった。しかし、室町末期において「動詞＋バ」・「動詞原形＋ナラバ」と「動詞タ形＋ナラバ」・「タラバ」は「非完了」・「完了」の差がそれほど重要なのではなく、前件と後件が時間の序列をなすことが重要なものではなからうか。「完了性」・「非完了性」が有効に働いているのは「反実仮想」の場合だけと言ってよい。「完了性」と「未完了性」により「タラバ」と「ナラバ」との違いを考えるのは再検討の必要があると思われる。

また、時間的な観点からみると、「動詞未然形＋バ」・「ナラバ」・「タラバ」のうち、「ナラバ」に表れる時間的な類型が「動詞未然形＋バ」と「タラバ」より多いことが分かった。この点から「ナラバ」の用法は「動詞未然形＋バ」・「タラバ」より広いと言える。

### 3 「已然形＋バ」の用法

次に「已然形＋バ」について考察しよう。まず、「已然形＋バ」の用法は（表5）のようにあらわれる。

（表5）	会話文	下心	諺・慣用句	地の文
動詞已然形＋バ	26	10	5	144
タレバ	9	0	0	54
ナレバ	16	0	0	11

（表5）はさきの（表1）と比べてみると、「已然形＋バ」が「未然形＋バ」と違って、地の文にたくさん出現することが分かる。例えば、23のような「場面転換」が起

こっている部分で、「已然形＋バ」が連続的に使われる現象がしばしば見られる。

- 23 イソボ主人に向うて言うやうは、「某は既にこの分でござれば、御分別あれかし。さあらば、又某にこの讒言を申し掛けた人々にも私が如くに仕れと仰せ付けられいかし。しからば、食した人は必ず露れまらしょうずる」と申せば、その時主人イソボが才幹な事を驚き、かの二人にイソボが所望の如く言い付けらるれば、兩人の者ども思うやうは、「温湯をば飲むとも、咽に指をさえ入れずは、苦しかるまじい」と思つて、一杯づつ引き受け引き受け飲むに、うそ甘い物を喰うた上なれば、何かはよからう、御前にはばかり程吐却したれば、何の要も無う化けが顕れた。
- (411-20)

「已然形＋バ」が時間の経過ともに生じた出来事を次々と叙述する場合にもちいられている。「未然形＋バ」が前件と密接に関連していることと比較すると大きく違っている。

次に会話文における「已然形＋バ」の文末成分がどのような様相を呈しているのか、という点についてまとめたのが(表6)ある。

(表6)	動詞ル形	動詞タ形	動詞連用＋難イ	名詞述語カ	デヤ形	デゴザル	デナイ	ナイ形	ヌ	ジ	マジ	マイ	心安イ	ウズル形	ウズ形	ウ形	命令
動詞已然形＋バ	7	1			2	1			1		3		1	4	1		6
タレバ			1		1					1		1			1	1	3
ナレバ		1		1	3		1	1	3		2		1	1		1	1

24のように「動詞ル形」で終わるもの、25のように「動詞タ形」で終わるもの、26のように「ちゃ」で終わるものが多用されることが分かる。(表2)と比較すると、「已然形＋バ」の文末は客観的な表現と主観的な表現と両方に跨っていることが明らかになる。既に「已然形＋バ」が地の文にも多く使われることを指摘した。「已然形＋バ」が客観的な表現も表すことができることと関係しそうである。

- 24 春夏未来の覚悟をすれば、秋冬は豊かに日を送る。(458-13)

- 25 我は貴辺の料理者なれば、身にも似合わぬ音曲をして、今日の獲物を失うた。
- (482-2)

- 26 春過ぎ、夏閑けて、秋も暮れ、冬が来れば、翼も地に落ち、力もつき弓の引き立てられよう便りも無うて、凍えて、屍を曝さるるはまた世に類もない浅ましい義ちゃ。(458-7)



「已然形＋バ」の前件と後件における主題の一致と不一致をまとめると、次のようになる。

①前件と後件の主題が一致する

地の文—28例 諺・慣用句—5例 下心—8例 会話文—17例

27 血を含んで人に吐けば、まづその口汚る。(412-12)

28 元来吃りぢんに、又その叱らるに肝をつぶいたれば、もの言う事も叶わいで、顔うち赤めてとちめくによって……(411-7)

29 イソボは、かねて巧んだ事なれば、件のグリホを四所に置いた。(436-20)

②前件と後件の主題が一致しない

地の文—202例 諺・慣用句—5例 下心—11例 会話文—29例

30 グレシャの国から数多くの雑役を曳き寄せたが、バビロニアの国に駒が嘶えば、必ずこの国の雑役が孕む事がある。(439-7)

31 御前にはばかる程吐却したれば、何の要も無う化けが顕れた。(412-9)

32 我は有る程の獣の王なれば、肢一つは王位の徳に供えい。(446-8)

以上のように、「已然形＋バ」には前件と後件の主題が一致しないものが大変多いことが分かった。前掲の23のように、「已然形＋バ」が連続してもちいられるような場合には主語は一致しがたいからである。つまり、「已然形＋バ」は前件と後件が大きく異なるような場合でも用いることができるということになる。

また、「已然形＋バ」における時間的な関係をまとめると、次の6タイプに分けることができる(番号は用例番号。尚、「非時」というのは前件が名詞述語であり、時間的順序関係がないことを表す)。

(表7)	ル形・タ形が動作性述語	ル形・タ形が状態性述語
動詞已然形＋バ	先行—後続 33、34、35	同時36
タレバ	先行—後続 37、38	同時39

(表8)	ル形・タ形が動作性述語	ル形・タ形が状態性述語	名詞述語
ナレバ	例なし	例なし	非時(形式名詞) 40 非時(普通名詞) 41

具体的には次のようである。

33 シャントは「～」と言えば、相手もその分約束して、互いに指金取り換いた。



(417-24)

- 34 自然も人に行き逢えば、藁芥の中に逃げ入って隠るるにも心安い。(449-1)  
35 血を含んで人に吐けば、まづその口汚る。(412-12)  
36 以前の主人は無心の枯木でござれば、然るべし主人を与え下されい。(454-14)  
37 一節承らうずるために参つたれば、少しの間ここにおりやれ。(477-4)  
38 さんざんに打擲して場中で恥をかかせたれば、泣く泣く烏の中に加わり、尾羽を  
窄め屈み廻った。(457-6)  
39 獅子以ての外に相煩うてさんざんの体であつたれば、万の獣それを問い訪う事暇  
もなかった。(502-6)  
40 一切人間のナツラの教えには、自由を得う事も、又は人に使われよう事も、その  
身の分別にある事なれば、只今某いづれをとらせられいとは申すに及ばぬ。  
(428-8)

- 41 驢馬は元より不覺人なれば、忽ち括りに掛かった。(498-12)

まず、前件と後件の事態が「先行—後続」という関係の例は33・34・35・37・38のようである。これらの形式はすべて前件が動作性述語である。

また、「先行—後続」の場合、33・37・38のように理由節の用法もしばしば見られる。

34・35のような「動詞已然形+バ」は時間的に「先行—後続」の関係を持ち、意味的に仮定条件を表し、「動詞未然形+バ」の用法にかなり近いと思われる(注6)。

さて、ロドリゲス『日本大文典』の中には「—バ」の用法について次のように書いてある(注7)。

・ある事の理由、又は起源を調べたり、質問したり、また応答したりする場合の言ひ方である。Mireba(見れば)と同義。(P78)

・Yomaba(読まば)一説むならば、読むつもりならば(P129)

この二つを見るだけならば、「動詞未然形+バ」と「動詞已然形+バ」に区別がありそうであるが、ロドリゲス自身区別していない箇所もある。

・Ba(ば)なりが肯定と否定の動詞の後に置かれたものは、条件又は接合の助辞として、何とならばとか何々だからとかの意味を示す。例えば、Ageba(上げば)、Agureba(上ぐれば)(P535)

ここでは、「動詞未然形+バ」と「動詞已然形+バ」と同じ意にしている。このことは両者の間にあまり差がないことを裏付ける(注8)。

前件と後件の事態が「同時」の36・39は「未然形+バ」と同じように前件が状態性述語であるが、後件の文末が36のような動作性述語と39のような状態性述語によって「接触的同時性」と「重複的同時性」に分けられる。また、理由を表す「未然形+バ」の後

半の文末はル形が現在を表し、タ形が過去を表すことが見られる。

前件と後件の事態が名詞述語の場合において、40・41のような前件と後件の間に時間的な継起と重複がない。時間を超越して、状態や性格を表す理由節になっている。つまり、「ナレバ」の用法はかなり制限があると思われる。

以上のように、「動詞已然形＋バ」における時間的な類型が「ナレバ」・「タレバ」における時間的な類型より多用されていると言えよう。

#### 4 まとめ

「未然形＋バ」の用法について、以上をまとめると次のようになる。

- ・殆どが会話文の中にあらわれる。
  - ・全部仮定を表す条件節に属する。
  - ・前件と後件の主題が一致すること、及び文法上の主題が一致しなくても関連性をもつことによって、「未然形＋バ」の従属度が高いと思われる。
  - ・時間的な観点からみると、「動詞未然形＋バ」・「ナラバ」・「タラバ」のうち、「ナラバ」に表れる時間的な類型が「動詞未然形＋バ」と「タラバ」より多く、この点から「ナラバ」の用法は「動詞未然形＋バ」・「タラバ」より広いと言える。
- 「已然形＋バ」の用法は次のようになる。
- ・仮定を表す条件節と時間の特性をもつ理由節と時間の特性を持たない理由節に跨っている。そして、地の文にも会話文にも使われる。
  - ・会話文の文末の成分は「未然形＋バ」における文末成分より種類が多いようである。動詞ル形・タ形などの成分もある。それゆえ、「已然形＋バ」の用法は主観的にも、客観的にも使うことができる。
  - ・前件と後件の主題が一致しないことが多いのは、特に地の文の「場面転換」が起っている部分で「已然形＋バ」が連続的にあらわれることと関係している。また、主題の不一致という現象は理由を表す接続節の従属度が低いために起こると思われる。しかし、仮定用法に近いものは従属度が高いようである。
  - ・「動詞未然形＋バ」と「動詞已然形＋バ」は意味的に非常に近い場合がある。
  - ・前件と後件の時間的な関係を対象に考察した結果、「動詞已然形＋バ」における時間的な類型が「ナレバ」・「タレバ」における時間的な類型より多いことが分かった。また、「ナレバ」の前には名詞述語しか使われない。従って、「ナレバ」の用法はかなり制限がある。

## 【注】

- 1 阪倉篤義『日本語表現の流れ』（1993、岩波書店）111ページ。
- 2 小林賢次『日本語条件表現史の研究』（1996、ひつじ書房）203ページ。
- 3 益岡隆志『モグリティの文法』（1991、くろしお出版）において、話し手が特定の聞き手に対する伝達のあり方を「対話文」とされる。本稿の筆者は「対話文」が「会話文」に相当するものと考えたい。また、「演述型」・「情意表出型」・「訴え型」・「疑問型」という対話文の類型が全て主観性をもつものと思われる。
- 4 森山卓郎「日本語における事態選択形式——「義務」「必要」「許可」などのムード形式の意味構造——」（1997、『国語学』188集）には、主題要素が文脈的に存在しているという指摘がある。この「主題要素」は本稿で言う「主題」に近いものと思われる。
- 5 時間的な関係について、工藤真由美『アスペクト・テンス体系とテキスト』（1995、ひつじ書房）「Ⅳ 時間の従属文」を参照した。従来、条件表現に関する研究には、前件と後件の因果性を大切に扱う論述が多いようである。しかし、前件と後件との間には、因果関係が成立すると同時に時間的な順序性も現れてくる。本稿では、時間的な順序性が重要だと考え、これを条件表現の用法の分析に必要なと考えた。また、「重複的」「接触的」というような考え方についても参照した。
- 6 土井忠生編訳『邦訳日葡辞書』（1980、岩波書店）765 ページ、「自然（xijen）」について「Moxi（もし、ひょっとして）」と説明されるので34の「已然形＋バ」は仮定を表す用法である。（大塚光信校注『キリシタン版エソボ物語』（1989 再版、角川文庫）55ページ参照。）
- 7 ジョアン・ロドリゲス原著・土井忠生訳注『ロドリゲス日本大文典』（1955、三省堂）
- 8 但し、仮定を表す「動詞未然形＋バ」と「動詞已然形＋バ」との間に微妙な違いがあったと思われる。「動詞已然形＋バ」には42・43のように「～という義ちゃ」・「～ものちゃ」という文末を持つものがある。これは「世の中にそういうふうに使われていることだ（ものだ）」という意味をさす。従って、仮定を表す「動詞已然形＋バ」が「動詞未然形＋バ」より一般的の意味をもつと考えられる。
- 42 恩を仇を以て報すれば、天罰のかれずと言う義ちゃ。（495-8）
- 43 慈心或いは我慢によって同じ国所の人喧嘩、闘争をし、私取り合いに及べば他所、他郷からその弊に乗って、論をなす双方ともに従ゆるものちゃ。（500-5）

（コウ ブンキ 岡山大学大学院修士課程一年）